

平成 17 年度卒業論文

「新聞の傾向を探る
ミリエット紙とタハ・アクヨル」

学籍番号 8501055

加賀谷 ゆみ

1 まえがき	2
2 新聞に左派・右派を見る	3
2-1 左派・右派の定義	3
2-2 トルコの政治における左派・右派という軸	3
3 新聞の左右の表現される場所	5
3-1 紙面の統一	5
3-2 トルコの新聞のコラムと記事	5
3-3 考察にあたって着目すべき具体的表現	6
4 現在の記者・コラムニストの位置	7
4-1 80年以降の基本的構造	7
4-2 現在の新聞・記者ら	7
5 2002年11月総選挙に見るコラムと記事	9
5-1 素材の説明	9
5-2 1面記事の検証	10
5-3 アクヨルのコラムの検証	17
5-4 まとめ	21
6 結び	22
7 参照文献一覧	23

1 まえがき

テレビなど視覚メディアの登場により文字メディアの衰退が取りざたされるようになって久しい。その間文字メディアは、視覚メディアとの連携、紙製の他に電子出版という形をとるなど激変しながらも独自の地位を保っている。それは文字メディアの「詳細な情報を繰り返し引き出すことができる」という性質が支持されてのことだろう。

また文字メディアの中でも新聞は広範な新しい情報を高い頻度で提供するという特徴を持つ。さらに言えばその情報に政治や社会問題と関連したものを含む。そしてそれらの事象に対して自ら考えるのに十分な時間を読者に与える。つまり世論形成とも密接に関わる言論機関であることが特色である。その言論機能を担うのは一部のコラムやオピニオン性を含む一般記事であり、これらは他の媒体に対して新聞の独自の武器だと言える。

本稿はこのコラムとオピニオン性を含む一般記事に着目し新聞を考察したものである。なお、考察にあたってはコラムと記事を左派的・右派的という観点から分析した。これは新聞に期待される世論形成という役割のうち、「左派か右派か」という問題は最も重要な事項の一つであると考えたからである。また過去にこういった観点からのコラム・記事研究が十分なされていないことからである。コラムと記事という観点から実際に検証を行う際にはミリエット紙のタハ・アクヨル氏のコラムと一般記事を素材とした。

一方、ここで考察される政治事象のアクターである政党、政治家の視点から見てもメディアは欠かせない存在である。議会や集会などでの政党や政治家の行動、またあらゆる場面での声明はメディアによって国民に知らされてはじめて効果を持つからである。政党や政治家の動きを国民が知り、それが投票行動に結びつくことが政治事象を担う者が期待する最大の効果である。

さらに無党派・浮動票が多いと言われるトルコにあつては直接政党の機関紙を読み、集会や講演から政党や政治家の意見を聞く機会はず、政治に関する情報はもっぱら一般的なメディアから仕入れるという人も多い。情報の入手経路が一般的なメディアに限定されているとすれば、当然メディアの報じ方一つで投票に大きな変化が生まれることが予想される。ここでいうメディアとは新聞に限らないが、詳細な情報とその情報に対して考える時間を与えるという新聞の役割を考えれば、新聞の生み出す効果は決して小さいとは言えない。以上のことから新聞を考察する意義は大きいと考えられる。

本稿では 1 章で新聞の左派・右派を一般的に定義した後、トルコ政治における左派・右派の定義を確認し、2 章では新聞の左派・右派が新聞のどの部分に表出されるかに着目している。また 3 章では現在の記者・コラムニストの位置について説明している。4 章では素材とした 2002 年の新聞の説明をした後、記事とコラムの考察と分析をしている。5 章では本稿を総括している。

2 新聞に左派・右派を見る

2-1 左派・右派の定義

新聞が左派・右派どちらに属するかは政治事象をどうとらえ報じるかによって決まるといってよいだろう。新聞は情報媒体であり基本的には新聞そのものが政治活動を行うものではない。また現代ジャーナリズムの基本として客観報道原則を定めている国も多い。しかし情報を伝達するなかで表現の仕方を選択することで情報に解釈を加えることは避けられない。またどの情報を記事にするかを選択する時点で新聞ごとの違いが生じる。現実の政治事象を伝える中で現実世界の左派・右派のどちらかを支持するような表現・記事が新聞によって選択され、そこに新聞の左派・右派が表れる。また新聞自体が左派・右派支持を公言している場合もある。

つまり新聞の左派・右派は書かれた文字列の内容が現実の政治事象の左派・右派のどちらを支持しているかによるものである。

2-2 トルコの政治における左派・右派という軸

一般的に左派・右派という言葉は広義にそれぞれ進歩主義的立場・保守的な立場という意味に使われているが、本稿でトルコの新聞を検証する前に、トルコの政治において左派・右派という言葉が具体的にどういった価値を表すのかを確認しておきたい。

トルコにおいて左右が生まれる土台はオスマン朝が崩壊しトルコ共和国が建国された時にできたと言われる。建国とともに生まれた新たな政治指導層は自らの拠り所を、ライクリッキとミリエッチリッキに置いた。ライクリッキは宗教が公的な場から排除されること、また人々の知性から清掃されることという意味を持った。ミリエッチリッキは一方ではオスマン朝の遺産を拒絶しテュルクであることとトルコ語の起源を新たに生み出そうとした。他方では「テュルク」の概念を世界から乖離したただ一つのモチーフとし防衛主義としての様相を呈した¹。

1940年代の複数政党制への移行は左右勢力の形成に直接の影響を与えた。2つ以上の政党があるということが有権者の前での競争の必要性をもたらし、各政党は選ばれるために差別化をはかるようになった。政治の代表的なイデオロギーがデヴレッチリッキ・ライクリッキ・ミリエッチリッキという3つ巴になり、デヴレッチリッキが広範な機能を持つ

¹ Mahçupyan, Etyen. 1996: “Türkiye’nin siyaset yelpazesi: Sağ ve sol,” *Cumhuriyet Dönemi Türkiye Ansiklopedisi*. Vol. 15. İstanbul: İletişim Yayınları.p.1244

ようになると、政党の差別化はライクリッキ・ミリエッチリッキ軸の上で起こった²。

ライクリッキはタンジマートから今日まで続く西洋化への模索の当然の結果であった。そして社会の特定の集団にとっては理性主義と普遍的な価値を代表している。ミリエッチリッキはその根本がオスマン主義にある、伝統的で固有の価値に基づいた共感を意味するようになる。

ライクリッキを妥協できない要素と見る政党たちは政治的軸の中で「左」として受け入れられている。これには2つの理由がある。まず、ムスタファ・ケマルの起こした運動は社会を変革する運動だったこと。「体制の変革」は論理的観点から左派の定義に入る。オスマン朝から共和国にかけての変革の核心は全システムをひとつの枠組みに収めていたイスラムの地位を、ライクリッキが取ったことである。そのためCHP路線は自らを体制の変革者、つまり左派と認識し、変化した体制の基礎的性質はライクリッキになった。2つめに、ライクリッキは普遍的な価値であるということ。全世界でも「左」は自らを宗教的・伝統的価値の対岸に置く。またある意味では自らを西洋の啓蒙主義の継承者として表現する。

一方トルコにおける「右派」政党らは、直接ライクリッキを排除していないが、その精神の基礎をミリエッチリッキに置いている。イスラムが政治の舞台から排除されるとともに、ミリエッチリッキが固有で伝統的なものとしての機能を引き受けた。しかし時とともにミリエッチリッキは2つの社会的要請に応え、広い解釈をされるようになった。この社会的要請の1つは宗教、2つめは地方の経済的利益である。これらの要請に応えたことで、トルコにおける右派の伝統は内容的に統一のできていない路線となった³。

なお、本稿では一部共産主義、無政府主義、労働運動、という意味で「左派」という言葉を使っている部分がある。

² Mahçupyan p.1245

³ Mahçupyan p.1246

3 新聞の左右の表現される場所

3-1 紙面の統一

我々は1章1節において新聞の左右が新聞に書かれた内容によって決まることを確認した。しかしながら新聞の内容に関わる者は通常1人ではない。経営者から報道記者、調査記者、コラムニスト、構成担当、各編集者、広告担当まで多くの人が関わっている。記者やコラムニストといった直接執筆に関わる者だけでも数名はいる。彼らは必ずしも1枚岩ではない。そのため新聞の左右は1つの新聞の中でも統一されていないことがある。

西部邁は日本の新聞においては社説によって新聞社の内部統制、読者への論調の一貫性の保証が図られてきたと述べ、紙面の統一が重要視されてきたことをうかがわせている⁴。一方エクレム・ドゥマンル（ザマン紙編集長）は質の良い新聞とは書き手の多様な声を載せたものだとして述べている⁵。どちらも特定の文脈の中での意見であり、ここから紙面の統一に対する一般的な評価は導き出せない。

紙面の統一についての是非は別として、本稿では新聞の紙面を詳細に見ることで1つの新聞の中での思想の統一または非統一について検証したい

検証にあたって、新聞の内容が表現される部分を2つに分けた。明らかに書き手が異なるものを選ぶ必要から1つはコラム、もう1つは1面記事とした。

3-2 トルコの新聞のコラムと記事

トルコの新聞には「ヤズ」または「キョシエヤズ」と呼ばれるコラムが連載されているのが普通である。新聞の顔となる常連コラムニストのものをはじめに、複数のコラムが載せられている。1日に何本のコラムが載せられているかは各紙による。また当然大きなニュースがあった時にはそれに連動してコラムも増える傾向にある。コラムの内容は政治から社会、スポーツ、美容、日記的なものまで幅広い。一方、記事の方も政治や社会での出来事からスポーツ、芸能関連まで幅広い分野を扱っている。

この中で本稿が関心を寄せるのは政治に関して書かれたコラムと記事ということになる。これは政治に関する部分を見るのが新聞の左右を見るのに最もふさわしいと考えるからである。

しかしながらそれは政治のニュース以外には新聞の左右の性質が現れる場所がないということではない。例えば「家族」という欄に載せられる理想的な家族像というのは十分新

⁴ 齋藤吉史 1988 : 『社説にみる世界と日本』 東洋書店 pp.16・17

⁵ 29 Mart 2004 Zaman

聞の左右を表現することになる。しかし本稿ではより直接の政治的傾向が現れる、政治に関する部分を見ていくこととする。

また記事に関しては新聞の支持する思想を探るという観点から 1 面の記事を対象とした。

3-3 考察にあたって着目すべき具体的表現

新聞の考察にあたっては、左派・右派のどちらを支持しているかが現れている記述をコラム・記事それぞれで見る。左派・右派のどちらを支持しているかは具体的な政党の名称や政治家の名前、またその良さを説明し読者を説得しようとする論理に見ることができる。

4 現在の記者・コラムニストの位置

4-1 80年以降の基本的構造

現在の記者やコラムニストの立たされている位置は80年以降のこの職業の展開から知ることができる。

80年以降、新聞記者という職業への不安感は増大した。軍部や政府による報道への弾圧に加え、新聞の経営者も記者の労働環境を悪化させていたからである。

80年のクーデタの後、軍部は治安の回復のために言論活動を取り締まった。軍部にとって望ましくない政治的思想を持っていた796人の記者に対し裁判が開かれ、そのうち218人は刑務所に入れられた⁶。また83年からのオザル政権時代には政治の腐敗に対する批判を抑えるために報道に圧力がかけられ、1990年までの間に2627人の記者が起訴された⁷。さらに新聞の原材料である紙の値上げを行い、ただでさえ値上げを繰り返していた各新聞を苦しめた。

新聞の経営者らは安い賃金で労働災害補償もない環境で記者たちを使っていた。軍政期に労働組合に対する制限が加えられるとこれを機に組合に加盟する記者を関連機関や管理部に異動させるなどして遠ざけた。また記者らとの労働契約を反故にすることも多かった⁸。さらに経営者らは情報を都合の良い方にゆがめようとするのだった⁹。

このような状況の中で記者らの中には新聞を離れる者が続出した。残った者は経営者の要望に追従して組織の中で出世することを目指すようになった。期間契約で働くことが一般的になり、保障はないが出世することにより高い報酬を手に入れられるという構造ができた¹⁰。

4-2 現在の新聞・記者ら

政府の報道弾圧に対しては、83年からの取り組みの後、88年にバスン・コンセイが設立された。初期には28紙、22誌、11通信社、6出版組織が参加していた。93年には261の組織と出版社と2166名の記者らが参加している。バスン・コンセイの定める16か条の

⁶ Koloğlu, Orhan. 1996: "Liberal ekonomi düzeninde basın rejimi," *Cumhuriyet Dönemi Türkiye Ansiklopedisi*. Vol.11 İstanbul: İletişim Yayınları. p.134

⁷ Koloğlu p.135

⁸ Koloğlu p.135

⁹ Koloğlu p.142

¹⁰ Koloğlu p.142

バスン・メスレッキ・イルケレリの基本は「自由な民主主義的システムの基本単位である国民が真実を知る権利を守ること、責任ある真の報道・出版を生活の欠かせない一部とすること、報道・出版従事者が職務を、自由で優れた報道・出版に期待されるレベルで続けられるように補助すること、となっている。「トルコ欧州経済協力体の間で共通項を作る協定 1963 年 (Türkiye ile Avrupa Ekonomik Topluluğu Arasında Ortaklık Yaratın Anlaşma)」の枠組みの流れにあったコンセイは大きな力を発揮することはなかったが、報道の自由を脅かすものへの対抗を示し文書化した点で功績を認められている¹¹。

その後も欧州からの報道の自由に対する要求は続いている。現在ではEU加盟の観点から政府は報道への様々な規制を緩める方向にあることが知られている。かつてのような政治思想への厳しい取締りは見られず、政治的な見解を新聞に載せることが可能になった。

経営者の意向に従うことで高い報酬を得ようとする者に記者という職業が利用されると指摘する声は現在でもある。1995 年にバスン・コンセイ会長は透明性の確保のために資産を申告するよう報道関係者に呼びかけたが、反響は大きくなかった¹²。新聞の経営者は新聞の顔となる主力コラムニストを抜擢するなど大きな力を持っていると考えられる。

¹¹ Koloğlu p.143

¹² Koloğlu p.143

5 2002 年 11 月総選挙に見るコラムと記事

5-1 素材の説明

考察にあたって素材としたのは 2002 年 11 月の総選挙の時期に電子版ミリエット紙に掲載された記事とタハ・アクヨル氏のコラムである。

ミリエット紙は 1950 年 5 月 3 日に創刊された日刊紙である。初期には政権党寄りの路線だったが、やがて中立的な立場を取るようになったと言われる。初期の経営者はアリー・ナヂ・カラジャン、エルジュメント・カラジャン、初期の編集長（ゲネルヤユンヨネトメニ）はアブディー・イペクチが務めた。1970 年代にトルコで最も売れている 3 紙の 1 つになった。1980 年にアイドゥン・ドアン・グループによって買収されてから、経営者は数回変わっている。近年のミリエット紙の主力コラムニストの 1 人がアクヨルである¹³。

アクヨルは文筆家、または社会学者として知られている人物である。1946 年 8 月 1 日にヨズガットに生まれ、ヨズガット高校を出て、イスタンブール大学法学部を 1968 年に卒業した。1967 年からヘルギュン紙で働き始める。また民族主義者行動党の運営部のメンバーだったことから 80 年クーデタの後 14 ヶ月間逮捕された。1986 年にはテルジュマン紙、1992 年にはメイダン紙でコラムを執筆した。ミリエット紙でコラムを書き始めたのは 1993 年からである¹⁴。

民族主義者行動党の運営部のメンバーとして逮捕され起訴された際の弁明に「民族主義者行動党はファシストではなく民主主義の政党であり、暴力部隊を組織するどころか暴力に反対している」「全ての民族主義者行動党支持者が暴力とファシズムに賛同しているという意見にぶつかった」¹⁵とある。また「党の講演で闘士を育成した」という意見に対しては、講演の目的は「トルコで経済的・社会的失望感が深まる中、増加が懸念されている暴力行為に反対し、大きな若年支持層を持つわが党の若いエネルギーを選挙活動や文化、芸術、文学に向けさせるためだった」¹⁶と述べている。また著書「1980 年代のトルコ」に載せた 1977 年の文には「トルコが少なくとも 4 年は続く経済危機に突入していること、このこと

¹³ 1986-1994: Ana Britanica: genel kültür ansiklopedisi. Vol.23. İstanbul: Ana Yayıncılık A. Ş. ve Encyclopaedia Britannica, Inc. İşbirliği. p.8

¹⁴ Sayılmış, Alişan. TURHAN, Metin. 2002: Ülücü Hareketin ABC'si. Ankara: Altinküre Yayınları p.690

¹⁵ 1982: Milliyetçi Hareket Partisi ve Ülkücü kuruluşlar davası SORGU. İstanbul: Mayaş Matbaacılık Yayın ve Ticaret A. Ş. pp.163-164

¹⁶ 同上 p.171

がトルコの一体性を構成する民族、宗派、社会階級間に緊張を生み出し、暴力行為を増加させるであろうこと、それを避けるためにあらゆる努力がなされ愛国心がこの点で明確になるだろうと書いた」¹⁷という。

アクヨルは学生時代から共和主義者農民国民党のゲンチリッキ・コルラルで活動しアルプアスラン・テュルケシに傾倒していたが一方でトルコ労働者党の国会議員チェティン・アルタンの講演を聞くなど左派の思想も学んだ。民族主義者行動党の出していたヘルギュン紙にも先鋭化する左右の対立の緩衝的な意見を載せていたという。釈放後には政治活動からは離れ、テルジュマン紙の編集長を務めた。テルジュマン紙は中道右派が分裂した母国党と正道党の両方を平等に支持していた。1990年に入りテルジュマン紙が困窮し人を雇えなくなると、アクヨルもテルジュマン紙を離れドアン・グループのメイダン紙で働くようになる。アイドゥン・ドアンによりミリエット紙に招かれる。アクヨルは「その頃には左派・右派の対立は鈍化していたが続いていた。ミリエットのような社会民主、左派、ケマリストとして知られている新聞にウルキュジュから来た右派コラムニストがいていいのかと言いながらミリエット紙で書き始めた」と述べている¹⁸。

これらのことからアクヨルは右派の流れから来ている人物であるが、暴力的な活動とは一線を画し、むしろ左右両派の思想に精通した知識人だと言える。しかし右派というイメージはぬぐいきれるものではなく、ミリエット紙では異色の存在として書き始めることになったと言えよう。

では実際にアクヨルはミリエット紙でどのような立場のコラムを書いているのだろうか。2002年11月の総選挙は左派と右派（ただし民族主義ではなく宗教保守）が対立する局面であったことから本稿の趣旨に最も沿う事例として取り上げた。ミリエット紙の本文の論調とアクヨルのコラムを追ってみよう。

5-2 1面記事の検証

2002年11月に結果としてトルコの歴史を塗り替えることになる選挙が行われた。その3ヶ月前の8月にはすでに選挙への期待は高まっていた。中でも各紙で注目されたのは、経済政策に明るい国務大臣ケマル・デルビシュが国会議員選挙に出馬するかどうか、出馬するのならどの党から出馬するののかという点だった。また、左派政党を連合させようという動きも大きな話題だった。まずはその頃のミリエット紙の1面記事を見てみよう¹⁹。

『DSPに来い！』デルビシュはワシントンからエジェビットに電話をかけた。首相

¹⁷ 同上 p.179

¹⁸ Akpınar, Hakan. 2002: Onların Hikayesi Nasıl Gazeteci Oldular? Ankara: Ümit Yayıncılık pp.27-39

¹⁹ 以下引用は <http://www.milliyet.com.tr/> より

は「数ヶ月前の誘いは有効だ」と述べた。デルビシュは「帰ったら話しましょう」と答えた。(8月1日①)

『連合がなければ私は去る』デルビシュは、「左派で連合を模索している。連合がかなわないのなら政治からは引退する」と述べる。(8月2日①)

『必ず一緒だ』デルビシュ、イスマイルジェムを自宅の朝食に招いた。家を出る際に「必ずイスマイル・ジェムと一緒に行動する」と述べた。(8月3日③)

『デルビシュはエルダル・イノニュに会った』国務大臣ケマル・デルビシュは「社会主義＝リベラルの統一」連合の模索を続けている。昨日昼前エルダル・イノニュと会ったデルビシュはその後オズカンとも一緒になった。(8月4日②)

『彼らは議員席を譲らない』エルダレイノニュはデルビシュに左派を統一するという試みに関する経験を語った。「バイカルとエジェビットらは絶対に自分を犠牲にはしない」と述べた。(8月5日①)

『最後のカードをめくる』デルビシュは国民の前に出る。作ろうとしている左派連合の重要性をひとつひとつ説明するのだ。そして他の政治的リーダーたちにはっきりと呼びかけるつもりだ。(8月6日①)

このように連日デルビシュの記事がトップ(①)、または2段目(②③)に載っている。しかしこのようにデルビシュの記事を大きく扱っていたのはミリエツ紙だけではない。例えばラディカル紙、イエニ・シャファック紙でも同様だった。デルビシュは左派連合を作ろうとしていることからデルビシュ関連のニュースは左派の重要事項にあたるのだが、これを大きく報じたからといってその新聞が左派を支持しているということではなく、この場合客観的に見て注目すべき事柄だったということである。しかしミリエツ紙の主張が垣間見える記事もある。それが8月7日の特集記事だ。

これはミリエツ紙のコラムニストや記者がトルコ各地に赴き現地の世論の動きをリポートするという連載の地方訪問記事である。

『タイIPPの「流行」は去るかもしれない』経済危機はトラブゾンにも大打撃を与えた。皆(註：政府に対し)反感を持っている。「試しにタイIPPにしてみよう」という風がここでは吹いているが「ケマル・デルビシュ＝イスマイル・ジェム」という2人組みから五体満足な子供が生まれるかもしれない。

8月8日以降も20日までと23、24、26、28、30日にデルビシュの記事がトップで伝えられている。これらはデルビシュの入党や左派連合の動きを客観的に伝える内容となっている。13日と16日にはデルビシュにとって不利益な記事を書いていることから客観的な報道をしようという態度が伺われる。

『トルコ式政治への第一歩』デルビシュはマルディン出身の実業家ヤージュが贈与した豪華なオフィスと2台の車を使い始めた（8月13日①）

『政治ではなく子供が欲しい』デルビシュが「私の代わりに話ができるのは彼女だけだ」と言ったスポークスマンのオヤ・ウンリュは実は政治にはあまり熱心ではない。ウンリュは「夫とはまずは子供が欲しい」と言った。（8月26日①）

しかし、一見客観的に見える1面の論調も当時の状況を加味すると違ったものに見える。なぜならその間に世論調査では公正発展党の支持率の高さが判明していた上、ミリエツト紙の地方訪問記事でも公正発展党を支持する声が高いことが分かっていたからである。

『AKPとCHPが先頭』ミリエツトのコラムニストらはコジャエリとボルで脈を取った。イズミットでは先頭にAKP、後ろにCHPがいる。現政権の3党は終わった。ボルではタイプが余裕。（8月2日③）

『反感票』カラビュクとカスタモヌでは政権党は最悪の打撃を受けた。どちらの都市でもCHPが上昇。MHPから離れた票はAKPへ流れる傾向にある。（8月3日②）

『EUに熱い視線を送る者はいない』ギュミュシュハーネでの状況はMHPとAKPが1人ずつ議員を出すだろうという方向にある。住民で他の党にチャンスを与えようという者はほとんどいない。（8月9日③）

それにも関わらず、公正発展党に関する詳細は載せられていない。代わりにトップを飾っていたのがデルビシュの動向を伝える記事だったのである。8月23日にはデルビシュの妻の話、30日にはデルビシュが雑誌に載せた文章の紹介がされるなどデルビシュ最良な面は見逃せない。

8月22日にデルビシュは期待されていた新トルコ党ではなく共和人民党に入ることを表明し、デルビシュや左派連合への失望が広がった。9月に入ると、デルビシュの記事は1面のトップからは消え、2段目以降の扱いが多くなる。また以前のように連日載るということ

はなくなっていく。内容的にはデルビシュの共和人民党での活動や、デルビシュに近い人物に関する個人的な話となっている。

『苦い薬はなし』デルビシュは今週をCHPの選挙公報誌の経済欄を書くことに使う。デルビシュは公報誌で「あなたがたは18ヶ月間苦い薬を飲んできた。これからは良くなる時」と書く予定。(9月3日③)

『なぜ恥じよう?』ケマル・デルビシュは自らを「深いCHP支持者」だとする。この深いCHP支持者とは何か?彼が言うには情緒的なつながりや家族から来るものらしい。デルビシュはCHPはトルコにとって重要な組織だと強調する。曰く、「組織は時に古くなり、弱くなる。しかしこれを蘇らせる必要がある。新しい党を作って、新たなページを開いたというわけにはいかないのだ」(9月6日②)

『デルビシュは肺ガン』ケマル・デルビシュは彼自身と妻に関する噂に答えた。米国籍のフリーメイソンではないこと、肺ガンの治療を受けていることを明らかにした。(9月10日③)

『候補者名簿が決定した』『デルビシュはイスタンブール第1区第1位』CHPの国会議員候補者名簿が決定した。(9月11日③)

『またデルビシュに戻る予定』CHP党首デニス・バイカルがオーストリアの経済フォーラムにオヤ・ウンリュを連れて行くと皆、ケマル・デルビシュのスポークスマンを奪ったのかと聞いた。(9月14日④)

『キャシーはトルコ人のよう』キャサリン・デルビシュに英語で質問をすると彼女はトルコ語で返答する。最も上手な料理はチェルケズ・タウウ。唯一の夢はアナトリアを広く旅行すること。(9月19日①)

デルビシュへの期待は薄れても、CHPへの支持を促すような記事は続いている。

『CHPへ行く運命にある』新民主主義運動の創始者ジェム・ボイナーは政治を実業家の視点から分析した。「中道左派は統一されるべきだ。中道右派の統一は今後の選挙にかかっている。実業界はトルコをEUに加盟させる、経済をケマル・デルビシュの担当する政府に票を入れる。我々の票はCHPに行く運命にある。」(9月9日②)

デルビシュ関連の報道が減り、代わりに増えてきたのが公正発展党党首エルドアン

判をめぐる記事である。

『候補にはなれない』高等裁判所の最有力者は8月30日のレセプションではっきりと明確に話した。「タイプ・エルドアンとエルバカンは絶対に選挙には出られない。」(9月1日①)

『タイプは前科なし』ディヤルバクル第4DGMはタイプ・エルドアンの「司法記録の消去」の求めを3対4で認めた。検察が起訴しなければ公正発展党党首タイプ・エルドアンは国会議員になれる。タイプ・エルドアンはこの判決に大喜びした。AKP支持者らもダヴルにズルナを鳴らした。(9月7日②)

『DGM判決は無効だ』ディヤルバクル第4DGMのタイプ・エルドアンの司法記録消去の判決に対する反論がヤルグタイ検察サブフ・カナドールから来た。(9月11日②)

『候補にはなれない』ヤルグタイ検察カナドールは閉鎖されたRPの旧党首ネヂメッティン・エルバカンとAKP党首エルドアンを逃さない。高等選挙委員会に意見書を送ったカナドールはエルドアンとエルバカンが国会議員に選ばれる条件を満たしていないとして、候補者申請を認めないよう求めた。(9月14日②)

『我々はへそを曲げない』アブドゥッラー・ギュルは「タイプ・エルドアンは選挙に出る。候補者にならなくてもAKPは選挙から退歩しない。選挙延期の動きにも賛同しない」と述べた。(9月17日①)

『判決：エルドアンは前科あり』第8裁判所はレジェプ・タイプ・エルドアンの前科記録の消去願いを棄却したディヤルバクル第3DGMの判決を支持した。(9月17日②)

『エルドアンの代わりにギュル』高等選挙委員会はタイプ・エルドアンと共にネヂメッティン・エルバカン、アクン・ビルダル、ムラト・ボズラク（註：の出馬に対し）ノーと言った。しかし彼らの政治家人生には扉を開けたままにした。「禁止された権利は回復されるべきだ。それは支持しよう」という結論だ。AKPはプロテストのためにエルドアンの代わりの候補を出さない。政策秘書ヤルチュン・バヤルはリーダーを示した。アブドゥッラー・ギュルだ。(9月21日②)

『最終決定：出馬できない』高等選挙委員会は国会議員候補者申請を拒否したAKP

党首レジェプ・タイイプ・エルドアン、旧R P党首ネヂメッティン・エルバカン、D E H A P候補者、旧S D P党首アクン・ビルダル、旧H A D E P党首ムラト・ボズラクの異議申し立ても「満場一致で」棄却した。(9月25日②)

しかしこれらの記事も数が多いが、内容的には中立的である。デルビシュや左派連合の話題性がなくなり、関心はエルドアンの裁判に集まっていたがミリエツ紙は右派の支持には回っていない。公正発展党の思想などの紹介もされないままである。

10月に入るとデルビシュに関する記事は激減する。

『キャシーおばさんは票を求めた』キャサリン・デルビシュはCHPのバッジをつけて初の遊説に出た。(10月13日③)

『さわって票を集めている』デルビシュはトルコ人が「さわって」「向き合って話す」ことにどれほど重きを置いているかに注目している。活動の最も重要な柱も国民1人1人と会話することからなる。(10月19日③)

『そ〜れ2、3、4』ケマル・デルビシュは昨日カドウキョイで忙しい1日を過ごした。朝はジャッデボスタン海岸でウォーキングに参加したデルビシュはその後国民も参加する集団エクササイズを始めた。(10月21日③)

また1面以外の記事では内容的にも批判に近いものが書かれるようになる。

『無駄遣いデルビシュ！』45日間の滞在費が1万6千ドル(10月1日)

『デルビシュはピリピリ』ビルギ大学である若者のプロテストに遭ったデルビシュは質問に答えず職員室に行った。(10月17日)

11月3日の選挙が近づく中でCHPに関する記事は内容的にCHPに好印象なものとなっている。デニズ・バイカルの公約や、公正発展党を疑問視する声、バイカルの演説、盛況だった集会の様子などが伝えられている。

『25%は有罪判決を受けた者』国会議員であることは検察や裁判官から逃れるためのものではない、と言うCHP党首バイカルは政権についたら不可侵権を制限すると述べた。(10月4日③)

『「疑問符付き」の政権は間違いだ』CHPの国会議員候補ヤシャル・ヌリー・オズテ

ュルクの選挙に関する見解はこうだ。「内部の組織や外の世界を『疑問符』で不安にさせない政権が必要条件だ。対岸の彼らが政権を取るかもしれないが近年の歴史を考える必要がある。」オズテュルクはテュルバン問題にも解決策があるという。(10月7日②)

『票は清い、売られてはならない』CHP党首デニズ・バイカルはいくつかの党の候補者の中には検察の追っている人物がいることや選挙広場で食事が配られていることを明らかにし「この金をどこから見つけてくるのだ？食料を買っても決して票を入れるにはこないでほしい。真の罪はこれらを配っている者に票を入れることだ。票を売らないでください。なぜなら票は清く、神聖なものだからです」と述べた。(10月16日②)

『バイカルに8万の団結心』CHPは昨日2つのミーティングでデモンストレーションを行った。CHPはエスキシェヒルに来たものをエリアに入れなかった。イズミルではデニズ・バイカルを約8万人が見た。(10月20日②)

一方公正発展党に関しては、汚職をほのめかす記事、失言を取り上げた記事、穏健なイメージを崩そうとする記事などマイナスな印象を残す記事が載せられている。

『破綻銀行のトップ会議』タイイップ・エルドアンはビレジキのミーティングの後ハリス・トプラクのボズユキュの工場の庭のキョシュクに来た。キョシュクにはトプラクのように、銀行が差し押さえられたもう2人がいた。ムスタファ・スゼルとメフメト・エミン・カラメフメトも参加したと発表された食事にエルドアンはトプラクホールディングの紋のついたヘリコプターで来た。(10月8日②)

『「破綻首脳会議」が不快にさせた』AKP党首は3人の破綻銀行家（ハリス・トプラク、ムスタファ・スゼル、メフメト・エミン・カラメフメト）と昨日行った首脳会議を擁護し「それを報道した者」を非難した。(10月9日③)

『今度の失言はギュルがした』エルドアンが「国内債務を先送りにする」と述べると市場は2日間でひどく下落した。昨日は副党首アブデュッラー・ギュルが、IMFがクレジットのために「なければならない」と言っていた利息以外の利益目標を批判した。(10月12日③)

『また昔のレコード』何度も「スカーフはわれわれの優先的課題ではない」と言ってきたAKPはこれ以上耐えられなかった。アルンチは広場で「殺人は終わる。これは

我々の名誉をかけた義務だ」 と言った。(10月19日①)

『この裁判がタイプ氏を病気にした』エルドアンは彼の財産に関連した裁判に「下痢だ」として行かなかった。5日間の診断書もらった。しかし他のどの予定もキャンセルしなかった。(10月24日①)

『AKPに解党裁判』ヤルグタイ検察長サビフ・カナドールは「法に反し策略を行っている」という理由によりAKPの解党を求める裁判を開いた。エルドアンが党首であることにも「改善」を求めた。(10月24日③)

5-3 アクヨルのコラムの検証

一方アクヨルのコラムはどうだろうか。①左派連合・右派連合について②公正発展党への距離③公正発展党への評価という点に着目してみよう。

①左派連合・右派連合について

8月のコラムを見ると、この時1番の話題であったデルビシュの動きに絡めて、どんな方法であれ左派が分裂している状態を改善するべきだという意見を載せていることが多い。

8月2日のコラムでは『デルビシュの意図』と題して、「デルビシュが『政治を運営できるだけの過半数』を求めている点にはうなずける。運営できない民主主義の一番の原因は過半数政党がなく、対極にある政党同士が連立することだ。しかし過半数を確保するための制度がない。」という意見を述べている。

8月6日にも『連合は難しい』というコラムで、「デルビシュが左派連合を作ろうとしているが、YTPゲネル・セクレテリ、イステミハン・タライは広い支持基盤が必要なのはもともとだが左派連合は法律的に無理だと言う。『連合ではなく、YTPの中で広い支持基盤を実現させるべきだ。選挙法の改正は時間的・憲法上の困難がある。各県でYTPへの期待が高まっている。』と述べている。もう何年も私は『政権を運営できるだけの過半数をつくるためにフランスのようなシステム』が必要だとここに書いている。デルビシュやユルマズのというような連合、チルレルのいう2方式の選挙では安定した過半数を作るのは無理だ。完璧ではないにしても連合が可能になればまだ良いのだが…」と書いている。

8月7日には『デルビシュはどうするのか』と題して、「デルビシュは経済を良くするためには安定した過半数を作る必要があると考えている。デルビシュは来られないがYTPには左派の実力者が集まってきている。バイカルの側近や左派に地盤がある者など。これを受けてYTPとCHPの緊張が高まるのは必至。しかしデルビシュは左派連合にCHPも参加するよう求めている。DSPからの離党者と昔のSHP党员が一緒にいて「新しさ」

があるのだろうか？デルビシュに近い者は「新しい候補者を重要視している。左派出身ではない者もYTPに來ている。ANAPが協力を約束してくればよいのだが…ANAPの協力にデルビシュも反対はしなかった」と答えた。分裂感を抱きながら我々は投票箱へ向かうだろう。左派分裂の生んだ問題を変えることができるのだろうか？健闘を祈る…」と書いている。

8月17日には『デルビシュはどこへ行く？』というコラムで「デルビシュがCHPを選んだことは私にとっては驚きだった。YTP側はデルビシュを非難している。結果としてイスマイル・ジェムよりもバイカルのほうが駆け引きがうまかったということだろう。デルビシュはCHPやDSP、そのほかの政党を排除して社会民主主義の連合はありえないと考えていた。しかし他の政党から見てCHPは合体しづらかったことが左派の分裂の原因だったのでは？デルビシュは今バイカルにもっと党を外に開放して大きな勢力にできるよう要請している。国民はYTPに新鮮味を感じたがYTPには組織がなかった。CHPには組織はあるが根を張った組織はどうして変わることができるだろうか？バイカルは候補者リストで懷を広くすることができるだろうか？」と書いている。

これら左派連合の形成を必死に考えているという印象を与えるコラムの他、デルビシュを直接評価する表現も見られる。20日には『デルビシュと左派』というコラムで「デルビシュが政界入りしてから批判も出ているが今なお経済政策に関しては右に出る者がいない。私はデルビシュが経済に明るいというところに個人的に価値を見出している。」と述べている。また22日の『バイカルの因果』では「79年の経済危機からの脱却にオザルが必要だったように今はデルビシュが必要だ。」としている。

一方右派に関しても分裂状態を改善し1つにまとまった連合をつくるべきだとしている。29日には『政治における砂丘』と題したコラムで、票の流動性の高さについて述べた後、「アメリカでは国民の76%が共和党か民主党を支持している。2党の中間にいる人たちはあたかも審判のような役目を果たす。きっちりしたシステムだ。我々もそれを使って中道左派と中道右派の基盤を作ることが必要だ。」と述べている。

しかし左派は共和人民党で連合するべきだとしているのに対し右派がどの党でまとまるべきなのかはここでは明言されていない。8月の時点で公正発展党が大きな勢力になっていることは明らかになっていたが公正発展党の元に右派政党が集まるべきだとは決して言わない。むしろ公正発展党をけん制しようとする記述が目立つ。しかし、当時公正発展党はまだ作られたばかりで未知数だったということを考えるとそれは当然だと言えよう。

9月に入ってから左派は共和人民党で連合するべし、右派がどの党でまとまるべきかは未定、といった内容になっている。9月4日には『政治的嵐』というコラムで「有権者は流動的であり、このような基盤の上に力強い政権を作るとは可能なのだろうか？左派ではCHPが大きな勢力になるのはやや簡単に思われる。しかし右派ではまだまだ嵐が来ると私は予想している。」としている。

その後、左派連合への期待が薄れるにつれて連合に関するコラムも減ってゆくが、10月2日の『今回は残念ながら！』というコラムでは「左派は左派、右派は右派でまとまらなければトルコは代償を払い続けることになる」と左右それぞれが連合をつくるべきとの考えを繰り返している。

②公正発展党への距離

アクトルは公正発展党に対しては慎重な態度をとっていた。まずエルドアンが選挙への出馬を国家機関によって阻まれようとしていることに関しては何度も異議を唱えている。この司法の中立を訴える態度は8月から10月まで一貫している。

8月8日『政治と司法?』コラムでは「エルドアンへの判決はどうなるのか? 決定が政治的なものではなく法的なものであることが肝心だ。西洋の国々は我々の前を行っているだけに法治国家や民主主義でも多くの経験を持っている。法の中立性が根付いている。エルドアンの判決も中立になされるべきだ。」と述べている。

9月11日『司法と政治』では「エルドアンは候補になれるのか? 全てを決めるのは高等選挙委員会だ。重要なのは下される判決が、政治的ではなく司法的に認められるものであることだ。高等選挙委員会はこれまでずっと司法的だった。今回も司法的であると私は確信している。」24日『法と思想』でも「法的根拠がない」としている。

10月24日『再び政治と司法』でも「TOBBは様々なレポートを作成するが、司法に対して「独立し中立」であることを求めている。今トルコでは中立な司法が必要とされている。」25日『法治国家?』でも「AKPやトルコ共産党を解散させようとする裁判。これは司法の混乱した図だ。」と書いている。

また公正発展党に対する一方的な先入観はきっぱりと排除している。8月8日『政治と司法?』コラムでは「安定した政治を作るための連合を組むことを拒否する者たちにAKPやHADEPを『お化け』のように見せる権利があるだろうか。」と、10月7日『ヒトラーもこうして来た』では「検察がエルドアンのことを『ヒトラーもこうして登場した』と言ったので調べたがヒトラーをヒトラーにしたのは軍隊風の規律と暴力の実施だ。選挙に影響を作るような発言はするべきじゃない。」と述べている。

しかし公正発展党の支持率が上がっていることの原因は外的要因にあるとしている。それは「他の選択肢がないから公正発展党を選ぶしかなかった」というものだ。また一気に支持率が伸びた分、下降するのも早いはずだと繰り返し述べている。

8月21日『政治的流動性』には「40%の有権者が最近3度の選挙で右派各政党の間をうろうろしたと私は予想している。これまではRP、FP、MHPに流れていたが、最近ではAKPが伸びている。中道左派の政治家を吸収したAKPはいまや中道右派政党である。しかし一気に伸びた分は一気に減ることもある。右派にショックを与え、右派が考え直すきっかけになるだろう。」と書いている。

23日『中道右派AKPとCHP』には「あらゆるアンケートからAKPの勝利が確定し

ていることは、多くの票が流動したことの表れである。99年には当時の政権を避けて投票された票はMHPに流れたが、今はAKPに流れる。社会学者によると、中道右派支持層にとっては旗とエザンが大事な。つまり民族主義と保守的感情だ。さらにリベラルであることも求められる。このことを考えるとANAPもDYPも不十分だ。民族主義はMHPだったとしても保守的リベラルはAKPとなる。AKPは票がすぐに逃げかねないものであると知っておくべきだ。」としている。

27日『AKPかCHPか?』では「AKPの上昇の本当の理由は『社会の開発者』が60年からずっと中道右左派を分裂させてきたことだろう。人々は『次はこれを試してみるか』とAKPへ入れるのだ。本当の中道右左派が構築されるまでこの流動性・不安定さは続く。」と書く。

9月7日『深いCHP支持者であること』には「中道左派がCHPにまとまるのは私にも納得できる。右派ではAKPにまとまるというよりは『この党を今回は試してみよう』という気配が強い。」とある。

③公正発展党への評価

しかし公正発展党の伸張の理由を「他の選択肢がないからだ」と分析する一方で、公正発展党を評価するコラムも載せている。

9月5日『有権者の行動』では「エルトゥールルギュナイは『国民は自分の気持ちに近い政権を求めている。上から見下すような党には票を入れない。また、経済や暮らしを前進させられる者に投票する』と書いている。また『宗教や民族主義は有権者が自分に近い政権を求める中で吟味されるが、決して第一の要因ではない』としている。今経済の崩壊にさらされた人々と、2月28日に自分も侮辱されたと感じた人々は『反動』のためではなく『公正と発展』のためにAKP支持者になっているのだ。」

上記の9月5日の約1ヶ月前の8月9日には『白いトルコ人と田舎』というコラムで富裕層とそれ以外の人々との間に亀裂が入っていることに言及し、『『周辺』であるアナトリアが『中心』である都会に近づけるような連合が必要だ』としてトルコ社会に経済格差があることを指摘していた。経済的に恵まれない層の支持を獲得したという切り口から公正発展党を評価していることが分かる。

また10月3日のコラム『有権者とは誰だ?』では「ある信頼できる調査に依ればトルコの70%の人は貧しい。社会的怒りを利用した政党が出てこないのが不思議だ。調査によれば民族主義、敬虔さ、近代化が有権者の支持する要因だ。成長している党はその票がすぐなくなるものであると自覚すべし、落ちている党はなぜ有権者と親近感をつくれないのか考えよ。」と書いている。

その翌日4日のコラム『AKPの背景には何がある?』では「AKPは下層・中下層の国民と連帯感を築くことができたのだ。」と述べている。ここでも貧困層の支持を得た点を評価している。

しかし上記のような表現は公正発展党を評価しているとはいえ、「公正発展党の戦略的な成功を認める」という程度に留まっている。しかし選挙選挙直前の 10 月 26 日になってそれまで見られなかったような直接的な表現で公正発展党の価値を認めるコラムが掲載される。

コラム『宗教、政治、法』でアクヨルは「ギュルがブリュクセルで会議を開いた。穏健で地平の広い保守政治家だと私が評価しているギュルに対しヨーロッパ人は『イスラム国家を求めているのか』などくだらない質問をした。ギュルによれば、宗教を政党が代表することは正しくない。政治の過ちが宗教に転嫁されるからだという。エルバカンはそのエゴによって宗教にも害を与えた。AKPを作ったのはエルバカンのように第 3 世界としてのトルコではなく、都市化し商業化し教育レベルの高くなった、リベラルという価値を知ったトルコの若者である。AKPでは政治的権威という概念は揺らぎ、民主主義の理解が深い。」と書いている。

この内容はちょうど 1 週間前に 1 面に大見出しで『また昔のレコード』『世論に穏健なイメージを見せてきたAKPは選挙まで我慢できなかった』と載った記事の論調とは大きく乖離している。

5-4 まとめ

1 面記事で多く取り上げられた選挙と左派・右派に関するトピックは 8 月のデルビシュ関連から 9 月のエルドアン の 裁判、10 月の共和人民党、公正発展党関連へと漸次推移している。

左派・右派に関する記事の内容に着目すると、8 月のデルビシュの記事は表現は客観的で中立的だが、支持率という観点から注目されるべき公正発展党に関する詳報が載せられておらず、記事の選択という点からは中立的とは言えない。9 月に入って増えたエルドアンの裁判の記事は事態をセンセーショナルに伝えるがミリエト紙の主観は見えてこない。10 月に入ってから共和人民党関連の記事では共和人民党にとって明るいニュースや共和人民党関係者が公正発展党を非難する内容となっている。公正発展党関連の記事では公正発展党の汚職を示唆し穏健さを否定するなどマイナスイメージを生む内容となっている。

次にアクヨルのコラムのうちデルビシュ、エルドアンの裁判、共和人民党、公正発展党に関するものの推移を見てみよう。まずデルビシュに関してのコラムは多くが 8 月中に書かれ、その内容はデルビシュが目指していた左派連合の可能性を様々に模索し、デルビシュが経済に精通しているところに価値を見出すというものである。エルドアンの裁判に関しては一貫して司法の中立を訴えている。共和人民党に関しては 8 月後半のデルビシュの入党後から 9 月初頭にかけて共和人民党に左派政党が集まるよう呼びかける内容となっている。公正発展党に関しては 8 月から 9 月まではその動向を冷静に分析し、公正発展党をむやみに批判する意見とは距離を置きつつ、かといって公正発展党を褒めはしないという

内容である。しかし 9 月、10 月に有権者からの視点で公正発展党が魅力を持っていることに言及する記事が 1 コラムずつ載っている。また選挙直前に公正発展党を多く評価する内容のコラムを書いている。

以上のことから、1 面記事は一貫して左派を支持し、アクヨルのコラムは左派の支持から徐々に右派の支持に変化したということが分かる。

ただしこの変化はアクヨルが右派的価値を主張しようとして起きたわけではないだろう。当初期待していたデルビシュによる左派連合が無理だと分かり、「リベラルで民主的」だと断った上での公正発展党支持だからである。しかしながら 1 面記事の論調とコラムの論調にズレが生じることがあるということは確認できた。

6 結び

新聞に左派・右派の傾向を見るということはどういうことなのだろうか。また 1 つの新聞は果たして 1 枚岩だと言えるのだろうか。そのようなテーマに端を発してはいるものの、本稿は 2002 年の 8 月から 10 月という狭い範囲において新聞の 1 面記事とコラムを分析したに過ぎない。左派・右派といった思想そのものではなくそれらの思想を基礎にしていると言われる具体的な政治家や政党に関する記述を追ったものとなっている。そのためここで分かることは非常に限定的である。

しかし、1 面記事の論調とコラムの論調に違いが生じることがあるという 1 例を示すことはできた。トルコの世論や政党にとって重要な存在であるトルコの新聞のありようを少し明らかにできたと言えるだろう。

7 参照文献一覧

Akpınar, Hakan. 2002: Onların Hikayesi Nasıl Gazeteci Oldular? Ankara: Ümit Yayıncılık

1986-1994: Ana Britanica: genel kültür ansiklopedisi. Vol.23. İstanbul: Ana Yayıncılık A. Ş. ve Encyclopaedia Britannica, Inc. İşbirliği.

Koloğlu, Orhan. 1996: “Liberal ekonomi düzeninde basın rejimi,” *Cumhuriyet Dönemi Türkiye Ansiklopedisi*. Vol.11 İstanbul: İletişim Yayınları.

Mahcupyan, Etyen. 1996: “Türkiye’nin siyaset yelpazesi: Sağ ve sol,” *Cumhuriyet Dönemi Türkiye Ansiklopedisi*. Vol. 15. İstanbul: İletişim Yayınları.

1982: Milliyetçi Hareket Partisi ve Ülkücü kuruluşlar davası SORGU. İstanbul: Mayıs Matbaacılık Yayın ve Ticaret A. Ş.

Sayılmış, Alişan. TURHAN, Metin. 2002: Ülkücü Hareketin ABC’si. Ankara: Altınküre Yayınları

齋藤吉史 1988 :『社説にみる世界と日本』東洋書店